

高度な専門性と実践的な指導力を有する教師の育成プログラム 「教師力育成講座」の開発 (2)

—全学教職課程の構築に向けた教職相談室機能の拡充—

松原 泰通*・山根 文男*・小川 潔*・江木 英二*・曾田 佳代子*・
山崎 光洋*・笠原 和彦*・高旗 浩志*・木多 功彦*¹

岡山大学教師教育開発センターは、教職支援部門を中心として前身の岡山大学教育学部附属教育実践総合センターから取り組んできた「高度な専門性と実践的な指導力を有する教師の育成プログラム（教師力育成講座）」の開発・実践を行っている。受講生に対するアンケート調査の結果から、本年度の講座も学生のニーズを的確にとらえた、質の高い内容を提供できていることが明らかになった。センターの全学化に伴い、昨年度は全体で4名であった他学部を受講生が、本年度は25名に増えた。講座の在り方を見直すための新しい視点として、講師を担当した校長先生からの意見聴取を行ない、これまでの取り組みを再検討した。その結果、学生自身の「気づき」に重点に置いた新しい全体構想図を作成した。

キーワード：教師力、実践的な指導力、現職校長、学生同士の討論、教育課題

※（岡山大学教師教育開発センター）

※1（旧岡山大学教育実践総合センター）

I. はじめに

本年度、これまでの岡山大学教育学部附属教育実践総合センターが「教師教育開発センター」として全学化され、教職相談室はこの中で教職支援部門を担うことになった。本稿では、岡山大学教育学部附属教育実践総合センターの事業として取り組んできた「高度な専門性と実践的な指導力を有する教師の育成プログラム」（以下、「教師力育成講座」）の成果を踏まえ、本年度継続的に実施した講座の概要及び成果と課題について考察した。

教職相談室における相談活動を通じて、在学生や新採用教員として赴任した卒業生たちの多くが、教育に関わる諸問題に対して不安を感じたり困惑したりしていることが明らかになった。このような不安を解消し、意欲的に教壇に立てる自信をつけること、そのための「教師力」の育成をしていくことが急務であり、重要性が高まっていると考え、「教師力育成講座」が開発された。講座を開発するにあたり作成した仮説及び全体構想を示したものが図1である。

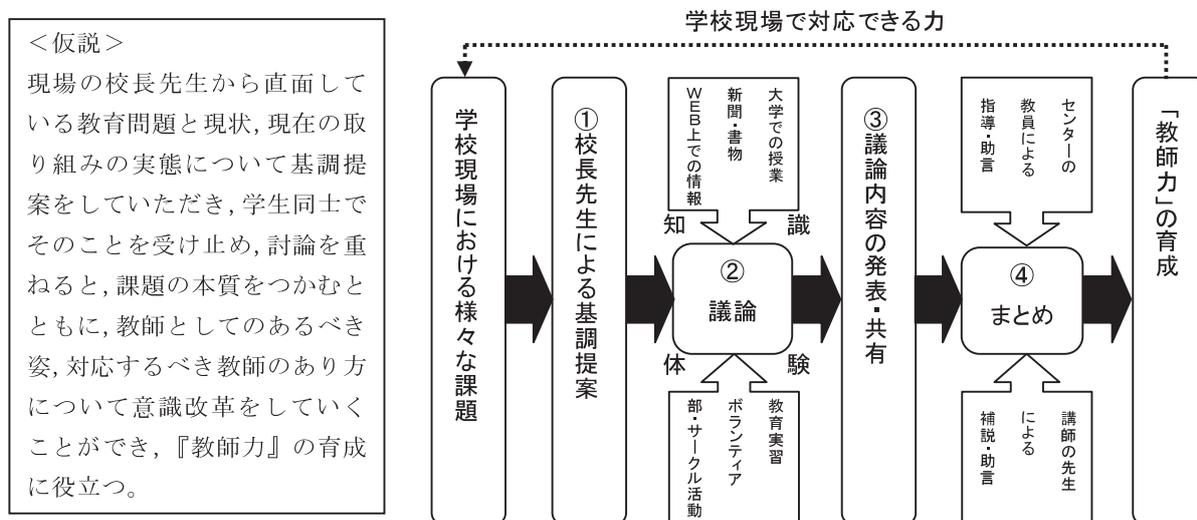


図1 「教師力育成講座」の仮説及び全体構想

表 1 「教師力育成講座」のテーマ

実施日	回	テーマ	講師
2009年 5月 27日	第1回	「子どもたちの生活とケータイの問題」	岡山市立中学校長
2009年 6月 24日	第2回	「発達障害など課題を抱えた子どもとどうかかわるか」	岡山市立小学校長
2009年 7月 8日	第3回	「いじめ・不登校の問題をどう考えるか」	岡山市立中学校長
2009年 10月 14日	第4回	「学校における「評価」について」	岡山市立中学校長
2009年 11月 25日	第5回	「道徳教育について」	岡山市立小学校長
2010年 1月 27日	第6回	「学校力の向上について」	岡山市立中学校長
2010年 5月 19日	第1回	「学校における食育推進」	岡山市立小学校長
2010年 6月 16日	第2回	「伝え合う力の育成」	岡山市立小学校長
2010年 7月 28日	第3回	「情報教育」	岡山市立中学校長
2010年 10月 27日	第4回	「外国語教育」	岡山市立中学校教諭
2010年 12月 1日	第5回	「理数教育の充実」	岡山市立小学校長

II. 問題の所在

昨年度の講座受講生を対象に行ったアンケート結果の分析から、以下の成果が明らかになった。

- ①普段接することが少ない校長先生による講演は、学生にとって新鮮であり、現場の「生（なま）の声」を聞く貴重な機会となった。
 - ②校長先生の熱い思いや体験を聞くことにより、学生の教職への意欲が高まった。
 - ③学生同士で議論を重ねることによって、新鮮な現場感覚に触れ強烈な刺激となり、多様な見方や考え方を身につけることができた。
 - ④教育問題を自らの教育実習やボランティアでの体験と結びつけて考えることができた。また自分が体験していないことであっても、友人の体験を聞くことにより、擬似的な体験として考えを広げることができた。
 - ⑤議論後の「まとめ」において、大学教員や講師の先生から適切な指導・助言を受けることにより、学生間での議論だけでは到達できない見方や考え方について、気づくことができた。
 - ⑥講座で考えたことを受けて、さらに学ぼうとする意欲が生まれた。
 - ⑦講座への参加を通して、学生自身が現場で対応する力が身につけてきたと実感することができた。
- 昨年度は初年度ということもあり、企画する側も受講する側も緊張感を持って参加していたため、上述のような素晴らしい成果が上がったとも考えられる。そこで、「本年度も引き続き質の高い講座を提供できていたか」ということを中心に、以下の3点についての調査及び分析・検討を行った。

- ①本年度に実施した講座についてのアンケート結果を昨年度の回答と比較することにより、本年度の講座の質的検討を行う。

- ②他学部生の参加状況を調査し、全学センターが主催する講座としての成果と課題を明らかにする。
- ③講師を担当した校長先生の感想や講座における発言を吟味し、本講座の成果と課題を再検証する。

III. 本年度の講座に対する学生の満足度

1. 「教師力育成講座」の概要

これまでに実施した講座のテーマを示したものが表1である。講師の先生からテーマに関する基調提案を聞いた後、学生達は6人前後のグループで議論を行った。約30分間の議論の後、各グループで出た意見を発表し、それを受けて講師がまとめの講評を行うのが1回の講座の流れである。

2. 調査内容と質問項目

各回の最後には、講座に対するアンケートを行った。質問項目の概要は以下の通りである。

- ①基調提案（最初のお話）について、どのように感じましたか。
- ②グループでの話し合いは、活発に行われましたか。
- ③グループでの話し合い中、あなた自身の発言はどうでしたか。
- ④話し合いの時間の長さはどうでしたか。
- ⑤まとめ（最後のお話）について、どのように感じましたか。
- ⑥今回の講座で考えたことは、あなたが教師を目指す上で役に立つと思いますか。
- ⑦次回の講座も参加したいと思いますか。

質問項目によって若干表現が異なるが、回答は、「とても考えさせられた」「どちらかといえば考えさせられた」「どちらかといえば考えさせられなかった」「考えさせられなかった」「分からない」等のように、5件法で回答するよう求めた。

表 2 講座についてのアンケート結果

		2009 年度						2010 年度					2009 合計	2010 合計	平均値の 差の検定	
		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)			t	p<
参加人数		36	68	76	34	23	37	60	58	35	24	31	274	208		
①基調 提案	平均	4.89	4.94	4.89	4.56	4.82	4.92	4.90	4.97	4.62	4.96	4.68	4.86	4.84	0.380	
	SD	0.31	0.24	0.31	0.77	0.39	0.27	0.30	0.18	0.54	0.20	0.78	0.41	0.45		
②話し 合い	平均	4.67	4.59	4.56	4.03	4.05	4.46	4.52	4.48	4.35	4.64	4.37	4.46	4.47	-0.188	
	SD	0.47	0.52	0.55	0.38	0.56	0.64	0.81	0.53	0.68	0.48	0.71	0.57	0.67		
③発言	平均	4.14	4.09	4.12	3.74	3.77	3.95	4.10	4.19	3.94	4.18	4.10	4.01	4.11	-1.375	
	SD	0.75	0.84	0.71	0.78	0.52	0.77	0.77	0.68	0.73	0.72	0.79	0.78	0.74		
④長さ	平均	4.31	4.22	4.05	4.35	4.18	3.95	4.22	4.40	4.06	4.59	4.37	4.16	4.30	-1.736	
	SD	0.46	0.89	0.86	0.87	1.03	1.04	0.90	0.85	0.87	0.78	0.91	0.88	0.88		
⑤まとめ	平均	4.75	4.85	4.75	4.76	4.86	4.81	5.00	4.95	4.85	4.91	4.87	4.80	4.93	-3.754	.001
	SD	0.72	0.55	0.46	0.42	0.34	0.39	0.00	0.22	0.35	0.29	0.34	0.51	0.25		
⑥考えた こと	平均	4.94	4.97	4.95	4.94	5.00	4.92	4.97	5.00	4.82	5.00	4.84	4.95	4.94	0.729	
	SD	0.23	0.17	0.22	0.24	0.00	0.27	0.18	0.00	0.38	0.00	0.37	0.21	0.24		
⑦次回 講座	平均	5.00	4.88	4.84	4.79	4.43	4.8	4.98	4.96	4.97	4.95	4.52	4.83	4.9	-1.478	
	SD	0.00	0.32	0.68	0.41	1.18	0.71	0.13	0.18	0.17	0.21	1.01	0.61	0.46		

各質問項目の回答について、選択肢1（例「とても考えさせられた」）を5点、選択肢2（例「どちらかといえば考えさせられた」）を4点、選択肢3「どちらかといえば考えさせられなかった」を3点、選択肢4（例「考えさせられなかった」）を2点、選択肢5（例「わからない」）を1点として集計した。無回答は集計から除外した。

この他、回答者の性別及び教員採用試験で受験する予定の学校種、受講した感想や質問（自由記述）、今回の講座で取り上げて欲しいテーマ（自由記述）等の質問項目を設定した。

3. 結果と考察

各回の講座で行ったアンケート結果の平均値と標準偏差、年度全体の平均値・標準偏差、さらに2009年度と2010年度全体の平均値のt検定の結果を示したものが表2である。t検定の結果、「⑤まとめ（最後のお話）」について、どのように感じましたか。」を除いたすべての項目において、2009年度の平均と2010年度の平均値に有意な差はなかった。本講座は、昨年度と同様、学生達のニーズを的確にとらえた、質の高い内容を提供することができていたといえる。

以下に示した受講生の感想からも、本講座は学生達に単なる知識や技術を伝えるだけのものではないということがわかる。自ら学ぼうとする意欲や教職に対するモチベーションを高め、「教師力」が身につけていることを自ら実感することができるのが、本講座の大きな特徴であるといえる。

< 2010年度受講生の感想（一部） >

●よかったと思うことの一つ目は、講師の先生のお話を聞けることだ。試行錯誤を重ね、たくさんの経

験を積まれた先生方の生の声を聞け、そして討論で仲間の意見を聞き、さらに深めていけたように思う。二つ目は、テーマにじっくり向き合えるきっかけとなることだ。仲間と意見を交換しあえる時間がとれるのは、本当に貴重だと思う。DVDで何度も見直すことができ、もう一度見てみるとまた違った見方も出来るのがおもしろい。この講座で学んだことを土台にし、常に子どもと向き合い、学び続ける教師でありたい。

- 真摯に向き合うべき課題であると、気づくことができた。先生方と子どもたちの関わりの中で課題に取り組んでいる姿、そのリアルな話を聞いてこそ、現場に出たいと思うことができた。講座で出会った全ての先生方、そして共に学んだ仲間に感謝している。
- 自分が教師としてどんなことをしていきたいかという思いをもつことができた。自分の目指す教師像に近づけるよう努力したい。
- この「教師力を身につけよう！講座」に参加する中で、着実に教師力が高まってきていると自信をもって言える。「あれもこれも実践したい」と思う、先生方の日々の努力の結晶を、仲間と共に学ぶ。先輩の先生方の松明を私たち学生が受け継ぐ場であったと思う。その松明をこれから出会う子どもたちや次世代の先生へと手渡していこう。
- この講座で、第一に、現場の声を聞いた。毎講座で、1年後の自分を想像しながら自分の思いを持っていくことができた。第二に、現場の愛を感じられた。学校現場には、こんなに素晴らしい先輩方がいてくださる、早く現場に出たいという思いをもった。

表 3 受講生の所属

所属		2009 年度						2010 年度					2009 年度		2010 年度	
		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	合計	%	合計	%
学校教育 教員養成 課程	小学校	16	48	47	14	8	22	44	51	25	19	17	155	56.6	156	75.0
	中学校	5	3	15	7	13	6	11	1	2	0	3	49	17.9	17	8.2
	障害児	7	8	6	3	1	3	0	2	0	0	0	28	10.2	2	1.0
養護教諭養成課程		0	4	3	6	0	6	0	0	0	0	0	19	6.9	0	0.0
教育学研究科		7	3	3	0	1	0	1	3	3	1	0	14	5.1	8	3.8
特別別科/特別専攻科*		0	1	0	4	0	0	0	0	0	0	0	5	1.8	0	0.0
他 学 部	理学部	1	0	1	0	0	0	0	0	2	1	8	2	—	11	—
	農学部	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	—	0	—
	工学部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	—	3	—
	環境理工学部	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	—	2	—
	MP コース	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	—	1	—
	文学部	0	0	0	0	0	0	2	1	2	3	0	0	—	8	—
	他学部合計	1	1	2	0	0	0	4	1	5	4	11	4	1.5	25	12.0
合計		36	68	76	34	23	37	60	58	35	24	31	274	100	208	100

* 特別別科＝養護教諭特別別科，特別専攻科＝特別支援教育特別専攻科

- 「今」の子どもや保護者が求めているものを、現場の先生の経験談，取り組みから考えることができ、自分が教師になったときのイメージを膨らませることができた。先生方の、子どもたちへの真摯で情熱的な指導や支援の姿勢からも、多くのことを学んだ。学生同士の討論では、先生のお話の内容を深く理解し消化することができ、また、現場でやってみたい、自分も気をつけたい、という意見も話し合う中で見つかった。
- 講座に出て、学生同士話し合いをしたり、講話を聞いたりすることで、自分の教育観を押し付け、「指導」しようとしすぎている自分に気づくことができた。目指すべき教師の理想像をより確かなものにして、実践していきたい。
- 一番驚いたのは言語活動の充実のために先生の学校で行われている活動である。「窓を開ける」という文でも軽い窓，重い窓などで言い方が全く違っていた。この講座で学んだことを自分でもっと深めていきたい。

IV. 他学部生の参加状況

1. 他学部生への参加の呼びかけ

本センターの全学化に伴い、「教師力育成講座」も岡山大学の8課程認定学部における全ての教職志望学生を対象とすることとなった。昨年度も教職相談室の利用者を中心に、他学部生にも講座への参加を呼びかけていたが、十分に告知することができていなかった。本年度は講座のポスターを各学部にも掲示し、他学部生の参加を広く呼びかけた。

2. 成果と課題

講座を受講した学生の所属を示したものが表3である。2009年度は他学部の受講生は4名（全受講者中の1.5%）であったが、2010年度は、第5回目の講座までの段階で25名（全受講者中の12.0%）に増えた。他学部の受講生としては、理学部・文学部が多かった。特に2010年度の第5回目の講座に参加した理学部の学生が多かったが、これはこの回のテーマが「理数教育の充実」であったことに起因していると考えられる。以上のことから、本年度の目標の1つであった他学部生の積極的な参加については、概ね達成できたといえる。

しかし、他学部の教員免許取得希望者が毎年約170名もいる現状からすると、本講座への参加者数は決して多いとはいえない。全学センターとして、全ての課程認定学部に対する教職支援及び教職に関する情報発信を、一層強く行っていく必要がある。

V. 「教師力育成講座」全体構想の再検証

1. 講座担当者からの意見聴取

講座のあり方を見直すための新しい視点として、講師を担当した校長先生からの意見聴取を行った。これらの中には、今後の講座を改善・検討していく上での重要な示唆が含まれていた。講師を担当した校長先生の感想・意見は、以下の通りである。

●教師力育成講座「食育」を担当して

講義内容は食育についてという依頼であったので、「学校における食育推進」という内容で、現在、食育の推進が盛んにいわれている訳、またその背景、そ

して、学校での食育推進の現状と課題について話をまとめ、グループ討議も含めて約2時間の講座であった。

本講座は、教育学部だけでなく教職課程認定学部全ての学生に案内し希望受講の講座であると事前に聞いていた。だから、学生は気楽な気持ちで参加するのだろうと高をくくっていた。しかし、教室に入ると学生が目差しと姿勢にその思いは一変し、学び取ろうとする熱意を感じた。過去に何度か講師を務めたことがあるが、今回は話をしているとても気持ちよく感じた。学生に感謝である。

そして、教師の「金の卵」を大事に育てるのでなく、現場の状況や厳しさ等を知らせ、覚悟を持って自らの夢であろう教師の道を進みなさいという親心にも似た岡山大学の本企画講座にも感銘した。

この講座を受講した学生と、またどこかの学校で再会したいものである。

【岡山市立小学校長・2010年5月19日実施】

●教師力育成講座「伝え合う力の育成」を担当して

グループ討議では、さすがに4年生だけあって「話すこと・聞くこと」の領域での、具体的で、いろいろな指導方法を知っていることに驚きました。

実際には子どもたちの実態に合わせてながら、その指導方法を改良していく力が教師として必要だと思いい、最後の私の感想で話させていただきました。(百マス計算・・・1分間スピーチを例にとって)

終わってから、一人の学生さんが、「僕は高校を希望しているのだけど、高校でも手を挙げさせたり、発表させたりする授業が望ましいのでしょうか？」という質問をしてくれましたので、私は「高校でも、生徒が意見をしっかり言える授業が出来たらいいですね。」と答えました。学生さんの真剣に聞いてくる態度が、すごく印象的でした。

校長としてどんな教員を採用してもらいたいのかについて、

- ①学級経営がしっかりできる教員
- ②生徒指導のできる教員
- ③少々の困難があっても逃げない教員

などが大事だという校長が多く、学級経営がしっかりできる教師なら、子どもの学力や自ら学ぶ力(生きる力)も当然の伸ばす力を持っていることは確かだと言われます。

その点において、岡山大学では、学校現場をしっかりと見通した理論、具体的な指導方法、心構え等を大事に

して学生に指導されていることがよくわかりました。また、「現場の先生からの問題提起」は、教師力を身につけるために、これからの教員をめざす学生にとっては、効果も大きく素晴らしい方法だと感じました。

【岡山市立小学校長・2010年6月16日実施】

●教師力育成講座「情報教育」を担当して

学校として具体的にどんな教育活動が有効であるか提案する段階になると、知識や経験の不足で具体的ににならない場面がでてきて、学生たちの議論やまとめている鉛筆が止まる場面が多く見られるようになりました。

現状を分析する段階で足りない部分が見えてきて、立ち往生していたのです。学生たちには、その足りないものは何かに気づくことが大切であると伝えました。つまり、何が足りないか認識したら、対処する方法を見つけることができるということです(正解ではなく最適解)。そして、現場ではその解決に当たるのは「あなたである」ということ、人と協力してことに当たることの価値と、そうすれば喜びが増し視野も広がることを伝えました。学生たちは、「それでいいのか」と力を抜いて受け止めてくれました。解決できない壁に突き当たったときこそ自分自身のパラダイム変換ができるチャンスであり、それができるかどうかは日ごろの問題意識にあると思います。

私自身うまくいかなかったことや、危機的な状況に陥ったことなど失敗例を織り交ぜながら話を進めました。短い時間でしたが、思いが先行してまとまらない内容でしたが学生たちは熱心に受け止めてくれ、充実した時間を過ごさせていただきました。

【岡山市立中学校長・2010年7月28日実施】

これらの意見から、今後の学生に対する指導及び講座の改善のポイントを次のように考えた。

- ①現場の状況や厳しさ等を知り、覚悟を持って教師の道を進むこと
- ②現場からの問題提起、具体的な指導方法、心構え等の大切さを受け止め、指導すること
- ③学生自身が、(教師として指導する上で)足りないことに気づくこと。

2. 講座担当者が行った講評の検討

各回の講座では、学生達が議論の結果を発表し、それを受けて講師の先生からまとめの講評をいただいている。そこでの発言の中で、本講座の本質

ともいえる重要な内容に言及している部分があった。以下は2人の校長先生が「まとめ」で行った講評の一部を抜粋したものである。

●2009年度第2回講座「発達障害など課題を抱えた子どもとどうかかわるか」での講評（一部）

先ほど、保護者へ事実をきちっと伝えていくというお話がありましたが、これをきちっと保護者へ伝えたら大変なことになります。保護者との連携は生易しいものではありません。発達障害を抱えた子どもは、生まれた時から育てにくいです。育てにくいのを保護者は一生懸命に育てます。だけども頑張りでも上手いかない。保護者は自分の子どもがどんなことで人に迷惑を掛けているのか、どんなことで困っているのか、学校でも自分の子がどのようなことをしているのかをよく知っています。一番分かっているのは担任ではなく保護者なのです。

また、障害を抱えた子どもも、自分はものすごく悪い子で、何やっても叱られてばかり、おじいちゃん、おばあちゃんからは従兄の中で一番悪いと言われ、近所でも、どこへ行っても嫌われる、お友達はできないことをよく分かっています。しかし、分かっているけれど、どうにもならない。保護者も分かっているけど、どうにもならない。それを改めて言われたら周りには皆敵だと思い、だんだん嫌になってきます。だから、素直に保護者との連携はできないのです。

私も保護者と話をしますが、第一声目には「お母さん苦勞されましたね。ごめんなさいね。学校の対応が十分ではなくつらい思いをさせて本当にごめんなさいね。」という言葉を掛けます。そして、そこから保護者との話し合いがやっとなります。お母さんも大きな涙を流しながら、実はこんなにつらかったのだとお話をされます。自分ではどうにもできなかったことを先生だからできる、先生だからしてくれた、さすが先生と思われて初めて信頼関係が結べるのです。できないことを教えられても信頼関係は結べないのです。ですから、関係機関へ繋ぐことは簡単なことではありません。簡単にできることではないのです。

【岡山市立小学校長・2010年6月24日実施】

●2010年度第2回講座「伝え合う力の育成」での講評（一部）

今日は「伝え合う力」ということでお話をさせていただき、そのテーマで皆さん話をしました。一つ気になることがあります。皆さんは学生で教育実習

しかしていません。1分間スピーチで子どもの力という話が出ましたが、1分間スピーチひとつにしてもそれが本当に良いのかどうか。

例えば百マス計算。百マス計算をよしとしてやってしまうと、大変なことになります。百マスするのであれば、私の学校では二十マス、いや、十マスのほうがよっぽど良い。「よーいドン」で計算させたら百マスは長すぎる。子どもが集中できる十マスを繰り返しやった方がよっぽど効果がある。書店などで百マス計算が良いという本が出れば、みんな良かれと思ってやってしまう。そうではなく、皆さんがもし現場で子どもの前に立った時、実際にいろいろやってみてください。例えば百マス計算に至るまでに、十マス計算、二十マス計算と増やしていき、やがて百マス計算へ。

1分間スピーチも同じで、最初はただどしどし話しかできません。恥ずかしくてできない子どもや、消極的な子どもは人前では話せません。そんな子どもに1分間しゃべれと言われても苦痛です。子どもを困らせないでください。苦手な子どもには、最初は10秒、20秒にする。話せない子どもには10秒間分のメモを書かせ頑張って読んでもらう。その子どものレベルに合ったことを徐々に上げていく。1分間スピーチが良いからといって、最初から先生が1分間頑張りましょうとやった場合、大変なことになります。だから、そういうことは実際に具体的に体験してみてください。1分間スピーチに至るまでに、子ども全員がしっかり1分間話せるようになるまでどういう段階が必要になるかが分かるようになります。

【岡山市立小学校長・2010年6月16日実施】

これらの講評内容を検討した結果、本講座の最大のポイントは2つの「気づき」であることが明らかになった。

学生同士がそれぞれの知識や経験を持ち寄って議論することにより、自分が体験したことのない知識や経験を知ることができる。その結果、個人が考えただけでは到達できないような結論を導き出すことができる。これが第一の気づきである。しかし、そこでの議論の結果を「まとめ」の際に発表した時に、「現実はそのものではない」と講師の校長先生から、時には厳しく、時には諭すように指導されることがある。これが第二の気づきである。学生達が一生懸命考え抜いた結論であっても、学校現場では通用しないことを知る。そこで、学生達は教職の難しさ、

奥深さを実感し、そこから「もっと学びたい」「もっと体験したい」という意欲が生まれる。これこそが本講座において身につけさせたい力であり、このように自ら考えて実践しようとする姿勢が身につけば、これから学校現場で出会う様々な課題に対しても適切に対応できると考えた。

3. 新しい全体構想図の作成

前掲の図1で示した通り、従来の全体構想図では講座内容の「基調提案」「議論」「議論内容の発表・共有」「まとめ」を並列的にとらえていた。しかし、2年間の取り組み及びその成果の検証を通じて、本講座の特徴は2つの「気づき」であることが明確になった。新しく作成した全体構想図が図2である。

VI. おわりに

今後の課題として、以下の2点を考えている。

1. 「教職実践演習」との関連

「教師力育成講座」では、在學生や新採用教員として赴任した卒業生の不安や問題意識、さらに彼ら自身の教師力の実態を踏まえたプログラム作りに取り組んできた。今後、より現場に役立つ教師力を育むためには、平成25年度からスタートする「教職実践演習」と本講座との関連を考え、教職実践演習を通して学ぶ内容やつかんでくる学生からの情報を的確に把握し、さらに実践現場に生きる知識や経験に深

めるため、本講座の内容を見直す必要がある。

2. 教員の資質能力について

教員に求められる資質能力については、様々な考えがある。

文部科学省は、平成18年7月11日の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において、教職課程の改革の方向及び具体的方策を次のように示している。

・改革の方向

大学の教職課程を、教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせるものに改革する。

・具体的方策

①教職課程の質的水準の向上

②教職実践演習の新設・必修化

使命感や責任感、教育的愛情等を持って、教科指導、生徒指導等を実践できる資質能力を最終的に形成し、確認する。

一方、全国連合小学校長会会長が平成22年3月15日に初中局教職員課長への回答「教員の資質向上について」では、養成段階における「教員に求められる資質能力」を次のように示している。

・豊かな人間性や社会性

・常識と教養

・教員としての心構え・基本的な指導技術

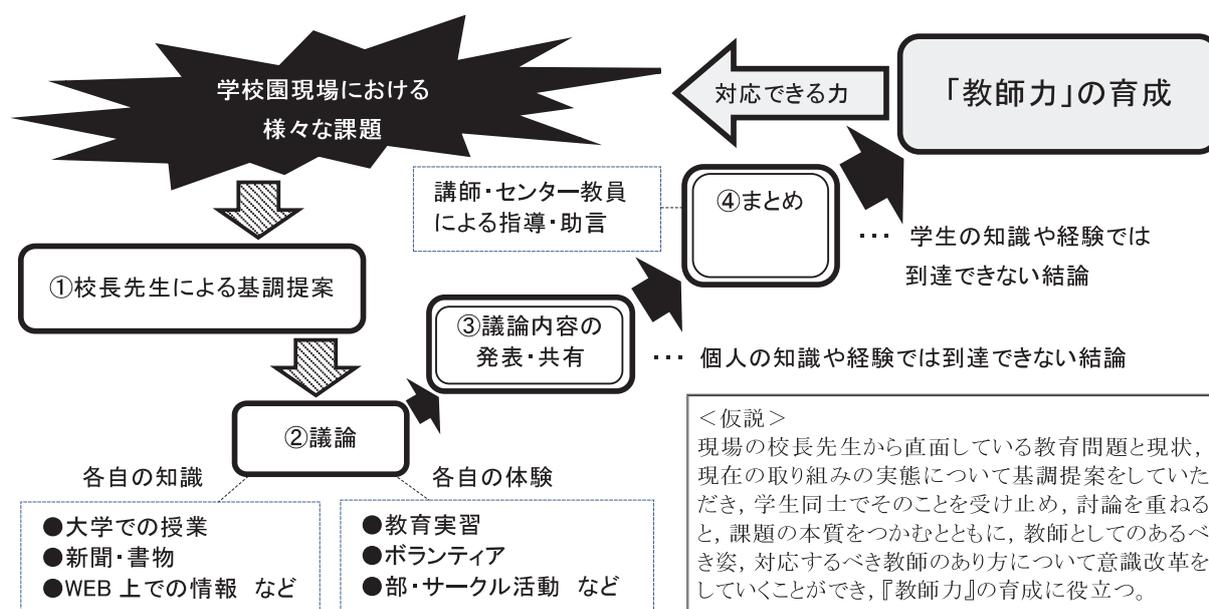


図2 「教師力育成講座」の全体構想図(改訂版)

* 仮説についての変更はない

- ・学級経営の技術
- ・子どもへの愛情・教育への情熱
- ・礼儀作法をはじめとした人間関係力
- ・コミュニケーション能力・情報活用能力
- ・教育相談の技術
- ・生活指導力
- ・教科指導力

また、47都道府県の「求める教師像」に関する調査（『教職課程』2010年10月号）では、「使命感」「情

熱」「豊かな人間性」「愛情」「意欲」「責任感」などが、教職に必要な資質として示されている。

教員に求められる資質能力については、共通点も相違点もある。社会状況等のとらえ方の違いに起因するものもあれば、社会の進展により新に浮かんでくる養成すべきものがあることが考えられる。常に、様々な角度から社会状況等を把握しつつ、本学として養成すべき教員の資質について考えていく必要がある。

Title :

Development of “A Training Course to Cultivate the Abilities Required for Teachers,” a Program to Bring on Teachers with a High Degree of Specialization and Practical Leadership – An Expansion of Functions of the Teaching Profession Counseling Room toward the Building of an All-Campus Course of Study for the Teaching Profession

Yasumichi MATSUBARA, Fumio YAMANE, Kiyoshi OGAWA, Eiji EGI, Kayoko SODA,
Mitsuhiro YAMASAKI, Kazuhiko KASAHARA, Hiroshi TAKAHATA, Katsuhiko KIDA ※
(Center for Teacher Education and Development, Okayama University)

※ (Research and Development Center for Educational Practice, Faculty of Education, Okayama University
: Predecessor of Center for Teacher Education and Development, Okayama University)

Keywords: abilities required for teachers, practical leadership capabilities, individuals currently serving as school principal, educational challenges
